

# 林 紘 義 を国会へ

## 信頼できる労働者・働く者の代表



参院比例区予定候補

かりませんが、許すことのできない、無責任な策動です。安倍はそうすれば、「自衛隊は違憲か合憲かの議論がなくなる」といいますが、「議論を無くすための改憲」などというものは聞いたことがありません。安倍自身、そんな憲法改定案が国民投票で否決されても、自衛隊が合憲であることは明らかだから実際には憲法改定が行われようが、なかるうが何も変わらないとうそぶきますが、無責任と、誠実さの完璧な欠落です。

しかも安倍が残すといひます現憲法9条には、「一切の戦力は保持しない」と明記されており、安倍はだからこそ自衛隊は「実力組織」だといつて「戦力」でも軍隊でもないと言ひ、ごまかすしかないのですが、そんな詭弁によつて、そもそも自衛隊とは何か、「実力組織」とは何なのかといった、本質的で根本的な議論もなく、平和主義に軍国主義といった対立

する2つの原則をくつつけ、密輸入しようとする、矛盾した試みが成功するはずありません。

憲法改定策動を公明党に賛成してもらうために、問題の根底をごまかし、ご都合主義的な条文をでっちあげて行われる安倍改憲はまともな憲法改定とはいえず、そんないい加減な形で憲法を扱うことはろくな結果をもたらさず、悔いと災いを千歳に残します。

### 6、敗北への道、志位の野党共闘路線

志位は16年の参院選の時も、17年の総選挙の時も、「本物の野党共闘なくして安倍政権に勝てない」と言い張ってきました。しかし過去2回の経験では、「本物の野党共闘といったものは生まれることなく、民主党の解体やその右派前原一派の裏切りによつて、野党共闘は解体して大敗北、

安倍の圧勝を助けました。しかし今志位は、そんな敗北路線に固執して、野党共闘なくしては勝てないと、性懲りもなく繰り返しています。しかし労働者・働く者は3回も敗北路線で闘うことはできません。

参院選を前にして、志位のまた持ち出している「本物の野党共闘」といったものが生まれる展望は——— 気配さえも——— 皆無です。

立憲の枝野は共産党と「本物の共闘をすればかえって票や議席を減らすと考へて、むしろ「本物の共闘——それがどんなものかは、誰一人理解できないのですが———」よりも、これまでの2回と同様に、共産党が「本物の共闘無しで」勝手に「立憲の応援をしてくれるのが一番利益と考へています。」

国民民主——かつての民進党右派、前原派らのブルジョア分子たち———もまた共産党との共闘など

もつてのほかと考へています。

そんな連中と一緒になつて、一体どんな「本物の野党共闘」が得るといふのでしょうか。せいぜいよくて、狐と狸の騙し合いといったものになるしかありません、といひますのは共産も立憲も国民もみな自党ファーストで、自分のことしか考へていない、腐敗した「既成政党の典型だからです。

闘う意思のある、すべての政党や政治勢力は自分の立場で、自分の闘い方で、それぞれ自主的に全力をあげて闘い、その結果として、安倍政権の打倒を勝ち取ればいいのであつて、お互いに手を縛りあつてもいいことは何もありません。

「別個に進んで、一緒に撃て」こそ諸政党の闘いの原則で、それが結局一番有効に、最大の力を発揮できるのであり、安倍政権にとつて最大の脅威ともなるのです。

連絡先 東京都練馬区春日町1-11-12 409 全国社研社

### 【強い信念をもつた人】

林さんの自慢は「若さ」。身体的機能を測定すると実年齢よりもだいぶ下の数字が出るとか。今でも家の近くで、2日に一度の割合で、約5キロのランニングを欠かさなかったが(タイムは30分位)、病気でさすがに5キロの疾走はやめ、現在は5キロ、50分ほどの二倍の時間をかけたジョギングに切り替えているらしい。

林さんの身体的若さは、強靱な精神に裏打ちされているのかもしれない。経歴からも明らかのように、学生時代、19歳の時に共産

党に入党、労働者解放運動に目覚めて以来(共産党は半年で余りでお粗末な実態に愛想をつかして離党)、約60年、一途にその理想実現に向つて闘ってきた。

林さんは、不正や理不尽なことが何よりも嫌いで、頑固なまでに真実を追求する。今の国会を見れば、共産や立憲民主など働く者の党などを見せ掛けながら、実際には腐敗した安倍自民など資本の勢力に屈従し、なれ合っている。林さんの憤怒と闘いへの意思は旺盛である。(T)

### 【林 紘 義 略歴】

1938年、長野県上田市に生まれる。同県伊那谷出身。教師の父の異動に伴い、伊那谷の各地に転校、転居を繰り返す。

小学校は下伊那の市田小(現、高森小)、下条小、会地小(現、阿智小)、中学校は会地中、上伊那美篤中(現、伊那市)、高校は珍しく転校なく3年間、伊那北高(当時、男子高)。3000×1

トルの雄大壮麗な西駒ヶ岳をこよなく愛し、その山麓に自己の性格をはぐくむ。

東京大学文学部卒、同農業経済学部大学院博士課程中退。1957-60年、東大教養学部自治会役員及び都学連執行委員として「勤評反対闘争」、「60年安保闘争」を闘う。2回拘留され、起訴、有罪判決を受ける。

以降、一貫して『社共』にも『新左翼』諸派にも批判的な、独自の社会主義路線を歩む。

1984年、社労党結成に参加。労働者の階級的立場と政治を訴えて、組織候補として国政選挙に数回挑戦するも、力足らずしていずれも落選。

02年、社労党の解散とサークル(マルクス主義同志会)への後退とともにその会員。

17年春、「労働の解放をめざす労働者党」(略称、労働者党)への、サークルの発展的解消に伴い同党代表。同年、神奈川11区の衆院選を陣頭に闘う。